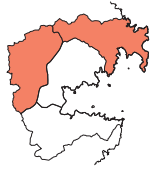


暗闇の集会所で作ったおにぎり 1,000 個

～内陸部の住民たち～



▲内陸に住む住民たちはすぐさま集まり、備蓄の米、井戸水、プロパンガスで避難所に届けるおにぎりを作った。

南三陸町では過去の津波被害の経験から、地域ぐるみで防災訓練を行ってきた。その際に、各地区の集会所で炊き出し訓練を行うこともあった。昔から冠婚葬祭での食事を地域の人々が協働して作ってきた伝統もあり、防災訓練以外にも日頃から地域行事や祭りなどで炊き出しを行う機会は多く、地域住民は大量のおにぎりを協力して手際よく作ることに慣れていた。

東日本大震災では、地震の激しい揺れと津波警報発令を受け、内陸の住民たちは炊き出しが必要になるといち早く判断した。電気も通信も途絶える中、声を掛け合い、備蓄の食材を持ち寄って集会所に集まり、懐中電灯やろうそくの明かりの中でおにぎりを握り続けた。中には、避難した先で炊き出し作業を行った住民もいる。しかし、予想をはるかに超える大災害に、白米はすぐ底をついた。備蓄の玄米があっても、電力供給が復旧しないために精米ができず、農機具の動力を使うなどして、避難者たちの食をまかない続けた。南三陸町では電気の復旧は 2011（平成 23）年 5 月中旬、水道の復旧は同年 8 月だった。

炊き出し 避難者など多くの人々に食事を作って提供すること